

忠義の意味

社會の進歩に隨ひ、人事の運動も他の事物と共に次第に密に入りて、其是非曲直を判斷すること容易ならず。一見孝に似て實際に不孝なるものあり。表面忠なるが如くにして却て大に不忠なるものあり。忠孝仁義は古來世人の重んじたる所にして、其これを重んずるの人心は古今に相違なしと雖も、忠義の性質は時勢と共に自から變化あり。彼の道德論者の如く、單に古人の嘉言善行なるものを唯一の標準として錯雜無量なる今人の運動を判斷し、苟も其標準に合はざるときは直に不忠不義の名を下すが如き、間違の甚だしきものなりとの次第は前號に開陳して讀者の一讀を経たる所なる可し。扱その道德論に忠義とは如何なるものなりやと云ふに、例へば天子蒙塵など云ふの場合に當り、義兵を起して王に勤むるが如き、最も稱贊する所にして、人民が君王の身邊に對して直接に本分を盡すを以て忠義の旨を得たるものと爲すが如し。直接の忠義、その功、固より大なり。往々人をして

感泣せしむるもの多しと雖も、人間世界の治亂を平均するに、亂世は短くして治世は長し。國中の人民は平時に於て君王に接近するの機會に乏しく、又容易に接近す可きに非ざるが故に、若しも右等直接の働のみを指して忠義と認るときは、忠義の區域は甚だ狭くして、然かも闇黒不祥の時代を待て始めて光を放つものと云はざるを得ず。天下豈斯の如きの理由ある可けんや。人々銘々に平素の業を勵むの結果、一國全體の文明富實を致して、外に對して國の重きを成し、其國に君臨する帝室の地位をして尊嚴光榮ならしむるもの、即ち國民の本分にして、之を人民平時の忠義と認めて實際に間違ある可らず。朝野の政治家が政論を講じて議政行政の實效を奏し、學者が書を著し物理を研究して文物を開發し、經濟家が商工業を興して國の富源を深くするが如きは申すまでもなく、彼の人力車夫が日夜奔走して纔ばかりの賃錢を儲け、細々積んで身代を造り、土地を買ひ倉を建つるが如きも、次第に其數を増すときは多數相集まりて國の富實を致し、外に對して富國の重きを成さしむるの結果は疑ふ可らず。歐米の文明各國が富國強兵を以て世界に冠たるも、其由來を尋れば、各國の人民が文明の事に迂闊ならずして能く勉めたるの成績を、國際の事實に現はしたるものなり。此點より見れば車夫の營業も農夫の勉強も間接には國に盡すの一端にして、苟も國法を重んじて孜々勉強する者は、其事の大小輕重を問はず、官民公私の別なく、都て忠義ならざるはなし。之に反して懶惰に日を送り、又は一身の私事の爲めに他に迷惑を掛くるが如きは、國に盡す可き本分を空しふするものにして、例へば富家に放蕩息子を生じて遂に欠落したりとせんに、本人の所行不埒千萬、主人を始め一家親類の者が息子の行衛探索の爲めに家業を止めて日夜騒動する其時間と費用とは、全く不生産的に消費するものにして、精細に算するときは國の富實の上に幾分の力を減ずるの結果を見る可し。放蕩息子の欠落は左迄の珍事に非ず。世上唯その不埒を咎るのみなれど、一國の經濟上より緻密に觀察する時は、

其所行は親に不孝なるのみならず、國家の富力を殺滅するの不忠と云はざるを得ず、錯雜なる人事の運動は判斷に容易ならざるの事實を見るに足る可し。左れば忠義の意味も古今時勢の相違に隨ひ、自から其區域を廣くすると共に亦その性質を異にし、恰も忠義の進化とも名く可き今日に當りて、苟も緻密の考を以てするに非ざれば或は忠不忠の實際を誤り、咎む可らざるを咎め、賞す可らざるを賞し、是非曲直を顛倒するの恐さへ少なからざるに、彼の古人の嘉言善行など稱する極端の例を唯一の標準と心得て、時勢の進歩變遷を知らざるこそ氣の毒の至りなれ。天子蒙塵の如き幾千百年間に一回も見ざる可らざる不祥の出來事を人臣盡節の場合とのみ認めて、却て平日の大事を忘れ、一國民の本分として盡す可き心掛を等閑に付するにも至らば、誰と共に國家の富強を謀り、誰と共に帝室の尊榮を冀ふ可けんや。今日の忠義は古代の如く單純一偏のものに非ず。古今時勢の進歩變遷に注意して世人を誤るの虞を戒めんこと我輩の偏に希望する所なり。

〔七月十日〕

〔註 前編の註参照。〕